早稲田大学審査学位論文（博士）の要旨

谷崎潤一郎研究

――古典回帰と「観光のまなざし」――

清水智史

一、本論文の目的

谷崎潤一郎の古典回帰とは何だったのか。本論文の目的はこの問いに答えることにある。

一般的に、谷崎の古典回帰とは一九三〇年前後の作風の変化を指している。出発期の作品は、映画などから影響を受けた西洋的モチーフが描かれていたが、関東大震災に伴う関西への移住が転機となって、日本・東洋の古典的なものへ傾倒していく。「卍」〔『改造』一九二八年三月～一九三〇年四月〕には方言の使用にみられるような関西の生活文化が、「蓼喰ふ虫」〔『大阪毎日新聞』一九二八年一二月四日～一九二九年六月一八日（『東京日日新聞』は一九二九年六月一九日まで）〕には人形浄瑠璃などが題材に選ばれたのち、「吉野葛」〔『中央公論』一九三一年一月～二月〕、「盲目物語」〔『中央公論』一九三一年九月〕、「蘆刈」〔『改造』一九三二年一一月～一二月〕、「春琴抄」〔『中央公論』一九三三年六月〕といった代表作を続々と発表する。

こうした一九三〇年前後の旺盛な執筆活動が古典回帰期と呼ばれている。同時期の作品には古典作品からの引用や前近代を舞台としたものが多いため、まさに古典へ「回帰」したと捉えられてきた。その要因としては、関西で人形浄瑠璃などの伝統文化に触れたこと、根津松子と出会ったことなどが指摘されている。そして、西洋文化を捨て、日本古典的な（あるいは東洋の）文化を選んだことは、千葉俊二『谷崎潤一郎――狐とマゾヒズム』〔小沢書店、一九九四年六月〕などにあるように、近代化への批判的な姿勢としても理解されている。とりわけ「陰翳礼讃」〔『経済往来』一九三三年一二月～一九三四年一月〕はそうした転身を体現した随筆だとされ、その記述から、谷崎が反近代的な作家であるという評価が定着することとなった。

しかし、こういった評価には留保が必要だろう。なぜなら一九三〇年前後にあって古典回帰は谷崎に特有のものではない上に、反近代・反西洋から日本古典への「礼讃」はきわめて危うい所作でもあるからだ。一九三〇年前後の日本は、昭和恐慌や満州事変などの影響により近代的価値観や国民国家への懐疑から歴史や文化の再確認が進み、国粋主義的性質を帯びていった時期である。こうした意識が同時代の作家に広く共有されたことは周知のとおりであり、それが例えば横光利一の右傾化、保田與重郎が率いる日本浪漫派の台頭に繋がっていくことはいうまでもない。かような時期にあって、谷崎の反近代的姿勢、および古典文化「礼讃」をどれほど言祝いでよいものだろうか。如上の問題意識のもと、本論文では谷崎の古典回帰を、同時代的な文脈に付置し直すことで再検討していきたい。近年では、文学が商業化・資本化する時代相に着目した、日高佳紀『谷崎潤一郎のディスクール　近代読者への接近』〔双文社、二〇一五年一〇

月〕や、五味渕典嗣『言葉を食べる――谷崎潤一郎、一九二〇～一九三一』〔世織書房、二〇〇九年一二月〕など、その同時代性の再考を試みる論もあるが、本論文で注目したいのは、観光という営みである。

同時期の谷崎の作品群をみわたしたとき、観光地の表象、あるいは旅をする登場人物が多いことに気がつく。例えば、「卍」では「三笠山」や「宝塚の新温泉」といった観光地の名称が書き込まれている。また「蓼喰ふ虫」では淡路島への観光が描かれ、「吉野葛」では桜の名所である吉野が舞台である。何より「旅のいろ／＼」〔『経済往来』一九三五年八月〕という随筆に「鉄道省、観光局、ツーリスト・ビュウローあたりの宣伝機関が抜け目なく客を誘引するから、名所と云ふ名所が皆その土地の特色を失ひ、都会の延長になつて行く」という観光地化への批判もみられる。

奇しくも、一九二〇年代から一九三〇年代にかけて国内における観光産業は活況を呈していた。明治時代以降、近代化に伴って発展を遂げ、一九一二年にはジャパン・ツーリスト・ビューローなどの旅行団体が活動を開始し、その結果、紀行文の流行や「支那趣味」言説の横溢など、文学者たちも恩恵を受けるようになる。そして、一九二〇年代以降には公共交通機関の拡充や外貨獲得の目的を背景として、一九二四年に日本旅行文化協会の設立、一九三〇年には国際観光局が設置される。新聞や雑誌には観光を促すような広告が踊り、ガイドブックも多く発行されるなど、官民の双方が観光の促進に熱をいれていく。このような経緯を経て、一九三〇年前後には観光が国内外を問わず盛んに、かつ身近になっていった。

こういった時代背景を念頭に置いたとき、観光地表象が頻出する一九三〇年前後の谷崎テクストをいかに捉えることができるか。本論文では、谷崎の古典回帰を観光という観点から再考することで、反近代の作家という模糊としたイメージを払拭するとともに、同時代的な文脈のなかにテクストをひらいていくことで、谷崎テクストの新たな相貌を提示したい。

その際、ジョン・アーリ、ヨーナス・ラースン著、加太宏邦訳『観光のまなざし〔増補改訂版〕』〔法政大学出版局、二〇一五年一二月〕によって提示された「観光のまなざし」という概念を導入する。観光客が向ける「ある特定の景色へのまなざしは、その個人の体験や思い出によって決まり、その枠組みは規範や様式で決まり、また、流布しているあれこれの場所についてのイメージとテクストにもよる」と記されるように、観光客が観光地をみるとき、そこで得られる感興は予め規定されたものだという。そして、その「枠組み」が「決定的な動機、技法、文化的なメガネとなって観光客が、具体的なモノや実態的な場所を「面白い、いい感じ、美しい」と見るより先に、先行してそう見えるようにしてしまっ

ている」とあるように、観光客は景物をみるときに、景物そのものをみているのではなく、予め持っていたイメージをそこに投影することになる。この「観光のまなざし」という概念を通し、谷崎テクストの古典回帰を改めて解釈していく。

二、本論文の構成

本論文は三部八章に序章・終章を加えた全一〇章構成である。

第一部「観光との邂逅と懸隔」では、谷崎の中国体験をもとに書かれた作品、および古典回帰期の嚆矢とされる作品について考察した。谷崎が観光という文化と本格的に接触したと思しい時期に書かれたテクストを検討することで、古典回帰の端緒と観光の交錯の様相を明らかにした。

第一章「案内と彷徨――中国体験におけるツーリズム――」では、一九一八年と一九二六年の二度の中国体験について考察した。一度目の中国体験以降の作品には、「蘇州紀行」〔『中央公論』一九一九年二月～三月（続編原題：「画舫記」）〕などに観光客的性質を有する人物が描かれる一方、「秦淮の夜」〔『中外』一九一九年二月、『新小説』一九一九年三月（原題：「南京奇望街」）〕では旅行中の予想外の出来事に対して恐怖するなど、観光客的性質とは異なった体験をする人物が描かれていた。ここからは、観光という営みのなかに揺動する意識を見出すことが出来る。二度目の渡航以後、谷崎は「支那趣味」から距離をとるようになるが、それは中国国内における観光産業の興隆への忌避であった可能性もあり、その後の諸作品へ接続していく「観光のまなざし」への批評性、あるいはその萌芽を看取できるものであった。

第二章「外縁と逸脱――「蓼喰ふ虫」と小出楢重の挿絵について――」では、「蓼喰ふ虫」について考察した。同作は新聞連載のなかで画家・小出楢重の挿絵と共同作業的に成立した作品だが、挿絵とテクストを連載順に照合していくと、小出の挿絵には書かれた物語を脱中心化する性質のものが多い。例えば、挿絵が掲載されている回の内容を表現しているのではなくそれ以前の回の内容を延長させて描いていたり、当該の回には直接記述されない物語の外縁を描くものがある。さらに淡路行きの場面では、関西という土地への甘美な憧憬、あるいは観光客的性質を持つ要の視点を顕在化する挿絵が描かれており、そうした性質を脱臼させる効果もみせていた。このことから、小出との共作のなかで、観光という営為に自覚的になっていた可能性を指摘できる。

第三章「記号と冥闇――「卍」における関西表象について――」では、「卍」の主要登場人物である園子と綿貫を対比的に捉え、その対照性について考察した。園子は関西私鉄の発行するガイドブックで奨励される生活をなぞるように送っていた一方、綿貫は神出鬼没の存在として描かれ、そうした生活とは程遠

い人物造型がなされていた。このことから明らかになるのは、近代化した大阪、とりわけキタに代表される「阪急文化圏」のような記号消費の場と親和性の高い園子と、暗く名もない路地に現れる綿貫との対立構造である。こうした対立構造を比喩的に捉えるならば、園子を綿貫が陥れていく過程が、近代化する関西の都市文化に対して無名の路地が存在感を示していく様子にもみえる。すなわち、観光などの大阪の消費文化への批評性が垣間みえるのだ。

みてきたように、第一部で扱ったテクストからは、観光という営為のなかで揺動する谷崎の思考の枠組みが見出せる。中国旅行というツーリズムの枠組みの内にあってその恩恵を受けつつも観光客的想像力の裂け目に触れた体験に次いで、小出楢重の挿絵によって観光客的性質が相対化されるプロセスを経て、観光を含む関西の都市文化への批評性が提示されたことは、関西への憧憬の根底に潜む「観光のまなざし」の存在、そしてそれとの葛藤を示しているといえよう。谷崎の古典回帰は観光との折衝のなかで齎されたといってよい。

第二部「観光と歴史消費批判」では観光と歴史にかんする問題を検討した。既述のように、「吉野葛」以降、歴史的素材が導入された作品が多く描かれ古典回帰期と呼ばれたが、当時は、一九二八年の『旅と伝説』創刊にみられる歴史探訪の流行など、観光資源として歴史的なものが消費されていた。テクストに描かれた歴史的題材と、同時代における歴史観光の流行、すなわち観光による歴史消費はどのように関連しているのか。ここでは、その接点について考察した。

第四章「「紙片」を再興する――「吉野葛」における歴史探訪と観光――」では、「吉野葛」について考察した。同作は一九一〇年前後と一九三〇年前後という二つの時間軸で物語が展開している。一九一〇年前後においては、観光地化された吉野駅周辺を避け、名所旧跡を訪ねる「私」が描かれる。しかし、そうした「私」の行動は、一九三〇年前後では同時代の歴史探訪の流行に一致してしまう。加えて、風景を「観光のまなざし」を通して認識するなど、観光客的性質を見出せるものであった。そこで「私」の旅の失敗が描かれることで、同時代的な観光のあり方との懸隔が示され、さらに、和紙の物質性が強調されるような描写からは、観光による歴史消費を可能にした同時代の情報環境への批評性も看取できる。

第五章「葛藤と盲目――「盲目物語」における琵琶湖と観光――」では、「盲目物語」における琵琶湖の存在について検討した。作中の琵琶湖は、お市の私的な記憶と強く結びつきつつ、織豊政権下における交通の要衝として公的な場でもあり、公／私の葛藤が刻まれた場であるとみなすことができる。一方、一九三〇年前後の琵琶湖は、「京都三大事業」や「大京都」言説を支える観光地の役割を担っており、公／私の葛藤が消失していた。そうした時代にあって、お市の葛

藤の描出、あるいは容易に意味を理解させない筆記法を採用することで、同時代の琵琶湖イメージとは異なった様相が作中に表現され、その懸隔が示されていた。

第六章「消費と消失――「蘆刈」における歴史消費と観光――」では、「蘆刈」について考察した。「わたし」は水無瀬へ赴き散策をするが、その様子は同時代に流行した歴史探訪と共通点を持ち、観光客的性質を有していた。一方、「男」はお遊について語る際に古典的イメージを付与しつつ回顧する。ここからは、歴史が目的／手段となる対比構造が見出せる。こうした対比は同時代の観光における歴史、すなわち、歴史への探求心が後にナショナリズム高揚の手段へ転化したことの比喩と捉えられる。このような転化は観光による歴史消費によって促されたが、それに対し、物語の結末で蘆原が消失することによって、観光客的な振る舞いや消費の構造は相対化される。

このように、古典回帰期の諸作からは、観光による歴史消費への抵抗を読み取ることができる。作中での観光客的性質への批判によって同時代の観光の様態を相対化することは、観光という営みを批判するだけでなく、それによって歴史が消費される時代相を批判的に捉え返すことになるだろう。とりわけ、後年に観光が戦時下の思想統制、ナショナリズムの高揚と結託した状況を踏まえれば、古典回帰期の谷崎テクストは、そうした状況の萌芽を批判しえているともいえる。単なる近代化批判ではない、同時代に根差した批評性を看取できるのだ。

第三部「浪漫的な語りへの抵抗」では、谷崎テクストがもつ同時代思潮への批評性を明らかにするため、「春琴抄」と「陰翳礼讃」を考察した。観光批判、あるいは歴史消費批判を通して同時代状況へ批評的に接近した谷崎テクストは、その後どのような批評性をみせたのか。古典回帰期の代表と目される両テクストを考察することで、従来とは異なる古典回帰の内実の提出を試みた。

第七章「「陰翳」を凝視する――東京批判と「陰翳礼讃」――」では「陰翳礼讃」について考察した。随筆「東京をおもふ」〔『中央公論』一九三四年一月～四月〕では、関東大震災からの内実を伴わない復興言説における「軽佻浮薄」への批判と、「変に侘しいものを「一寸オツだ」と云つて賞美する」東京特有の「オツ」精神批判が展開される。換言すれば、欠落の否認／肯定という精神性への批判である。そうした精神性が、一九三〇年代後半以降に影響力を持った日本浪漫派の「ロマン的イロニー」に見出せるならば、「東京をおもふ」における主張は、戦争賛美と共鳴した同時代の日本回帰言説と対蹠的である。これに抵抗するかのように、「陰翳礼讃」では暗さを単に称揚するだけではなく、「陰翳」を凝視する必要性、すなわち徹底的な認識の契機が強調された。ここにおいて、同時

代の日本・古典回帰的言説との差異・懸隔を見出すことができるだろう。

第八章「「雲間」を仰望する――「春琴抄」と「煙の都」――」では「春琴抄」について、第七章で考察した「陰翳礼讃」との共通性を確認しながら検討した。同作はこれまで、語りの構造や人物関係などから閉塞的なイメージが見出されてきたが、春琴と佐助の関係が屋内から屋外へ出るときに発展したこと、鶯や雲雀の描写などから、開放と閉塞の往還のイメージに満ちた作品だといえる。こうした作品を貫く運動は、第七章で検討した闇と光の間隙を凝視することとも比喩的につながっている。しかし、春琴の「遭難」以降に閉塞的なイメージが充満していき、工業化によって煙害に見舞われた大阪の様態とも重なりあってしまう。そこで、『鵙屋春琴伝』という書物に仮託して春琴を語る佐助、あるいはそれを分析しつつ語る「わたし」が、隠蔽と伝達の狭間に凝視を促すような語りを展開することで、テクストの形態の上で閉塞と開放の往還が呼び返される。こうしたあり方は、同時代の近代化・工業化する大阪のイメージとの懸隔を示すものであると同時に、「陰翳礼讃」と同様に同時代思潮への批評性を有するものでもあるだろう。

以上のように、「春琴抄」と「陰翳礼讃」からは「凝視」の主題という同時代への批評性が見出された。それは、日本文化から曖昧さを見出し称揚する言説や、その欠落を肯定する姿勢とは大きく異なる上に、一九三〇年前後の観光批判を通して培われたものとみることができる。同時代に流行した歴史消費は観光産業を基盤とするものであり、そこでは「観光のまなざし」によってあらかじめ規定された土地のイメージが生成され、時に浪漫的ともいえる様相を呈していたが、それに対し谷崎テクストは「観光のまなざし」を相対化し続けたのであり、それが結果として安易なロマンティシズムとは異なる「凝視」の問題意識へつながっていったのではないか。

如上の問題意識は、例えば小林秀雄「故郷を失つた文学」〔『文藝春秋』一九三三年五月〕と比較したときに、その位置をより明瞭に見出すことができる。谷崎の「芸談」〔『改造』一九三三年三月～四月（原題：「「芸」について」）〕を承けた小林は、「実際上の故郷といふものすら自明ではな」く、「西洋の影響を受けるのになれて、それが西洋の影響だかどうか判然しな」いならば「徒に日本精神だとか東洋精神だとか言つてみても始まりはしない」し「何処を眺めてもそんなものは見付かりはしない」と語る。

こうした小林の主張には、谷崎テクストから看取される観光への批評性との共通性を見出せる。一九三〇年前後に流行した観光による歴史消費が、「日本」的なるものを見出そうとしたことは既に述べた通りだが、それは小林にいわせれば「何処を眺めてもそんなものは見付かりはしない」ものである。「観光のま

なざし」とは「社会行為とその記号のシステムを前提」とした観光客側の視線であり、観光客が望む観光地の姿を見出してしまうものであって、いわば「見付かりはしない」ものを見出そうとするものなのだ。しかし、「日本」的なイメージを各所に付与し、「ほんの僅かな」差異を見出すことなくそのイメージへ浪漫的に没入・消費させようとしたのが一九三〇年前後の観光であったならば、谷崎テクストの批判の矛先はそうしたイメージの生成過程と虚妄性へ向いていたことになる。

だからこそ、小林の「故郷を失つた文学」に応えるかたちで発表された保田與重郎「土地を失つた文学」〔『文藝』一九三四年二月〕などとは対蹠的だといえる。「作家は地盤に立てばよい」と主張する保田は、「それに先行した観念も規範も概念もない」「具体的な土地」こそが「作家精神の地盤」だとするものの、そこで称揚されるのは「古来伝唱の農土」であって、民族性やある種の歴史観とイメージが投影された場所でしかないだろう。こうした故郷をめぐる議論がやがて時局の流れに吸収され、ナショナリズムの高揚に接続されたことは言を俟たない。

このように考えれば、谷崎テクストの古典回帰期における観光批判とは、「日本」的、歴史的なイメージの付与と消費を促す観光産業への批判であると同時に、一九三〇年前後の歴史をめぐるナショナルな言説をもその批判の射程に含むことになるだろう。故郷や民族、「日本」というイメージを土地や文学に投影し、アイデンティティの中核に据えることは、「観光のまなざし」と特質を分有しているからだ。そうしたイメージの生成に対してあてがわれたのが「凝視」の姿勢であって、浪漫的なイメージや観念に対する不断の認識が要請されていた。谷崎の古典回帰とは模糊でも雑駁でもない、きわめて鋭敏な同時代意識の表出だったのである。